令和３年度　学　校　関　係　者　評　価　書

鈴鹿市立鼓ヶ浦小学校

重点目標	評価項目と具体的な手立て	到達度のわかる目標（指標及び結果）	達成状況	成果○と課題▲	協議会委員からの意見感想等	今後の改善点
豊かな心を育む教育活動	**自尊感情の育成** ・子どもたちの活動に「出番・役割・評価」の場や自他の違いや良さを認める場を設ける。	・「自分には良いところがある」と答えた児童の割合80％以上 ⇒71．9％	B	○運動会や児童集会、たてわり班活動など子どもたちが主体となれる行事を計画した。各学年でもいいとところ探しや誕生会等、一人ひとりのよさをみんなで認め合うような取り組みをした。学習活動全体を通して、考えを伝え合い学びあうための土台として集団づくりについて全クラスで取り組んだ。 ▲一昨年、昨年と減少傾向にある。取り組みが成果につながっていない。回数ではなく内容の見直しをしていく必要がある。	・コロナ禍の影響が大きいと思いますが、更なる深掘を期待します。 ・コロナ禍ということもありなかなか運動会等行事に参加することが出来ず、子どもたちの様子を見ることができませんでした。以前の様に元気な子どもたちを見たい。 ・支援の必要な子に対する学校の進め方は、大変共感できる。 ・成果と課題を教師全員が把握をして前へ進んでほしい。 ・もっとお互いに関わり合いを持ち、いいところを探してそれを伸ばせる場があれば良いと思う。 ・今後の動向を見ながら支援を行っていきたい。 ・運動会、砂の造形、津波避難訓練で高学年児童の役割（自覚と行動）が印象に残った。 ・役割を持つことで意識が変わってきたと思う。	■コロナ禍で人とつながる機会が減っている時だからこそ、子どもたちが活躍できる場ひとつひとつを大切にし児童の自信につなげていく。クラス内だけではなく、委員会活動・たてわり班・学年間の活動など異学年、学校全体での関わりの場を設定する。
	道徳性・人権意識の育成 ・特別な支援が必要な子を核とする人権教育を推進する。	・一人ひとりの違いに寄り沿った学習支援のあり方を研究するとともに，個別の支援計画を作成・見直しを図る。（支援会議等を年回6回以上開催）⇒7回	A	○関係機関とも連携しながら、個々のニーズに必要な支援体制をとることができた。各担任や児童に関わる者どうしの日常的な情報交換を意識的に行うようにした。 ▲共通理解が不十分な部分については、今後、共有する機会を必要に応じて作っていく。		■情報の共有ができていない部分を明らかにする。また、情報共有にとどまらず、解決や具体的な対応などについて考える時間を多くとるようにしていく。（研修会・人権生指部会など）
確かな学力を育む教育活動	**学力向上の推進** ・学力向上の核となる児童を中心に据えた授業スタイルを構築する。	・全国学力・学習状況調査やみえスタディチェックにおいて，全国平均や県平均以上をめざす。 ⇒4年+4.1P，5年+1.1P，6年−3.6P	B	○4年・5年のみえスタディチェツクでは全国平均を上回った。朝のモジュール学習やパソコンのドリル学習、基礎問題の宿題等で基礎学力が向上を図った。 ▲強み弱みの分析をし、それに対する今後の取組を共有できたが、進捗状況の把握や交流が十分ではなかった。	・確実に成果が出ている。 ・低学年はよく発表している。班で話し合い考える方法もいいように思う ・11月授業参観では、素晴らしく手を挙げ、自分の意見を言える子どもたちがたくさん見受けられた。先生との信頼関係も見られた。 ・ICT活用授業で、先生方の教材準備と児童への指導に時間を多くとられるのでは。手段にとらわれすぎて教育課程を見失わないように。 ・落ち着きのない子どもも見られた。集中にかけているようである。楽しい教科とかはあるのでしょうか。 ・高学年になるほど内容が難しくなるので、まずは基礎をしっかりと。その上での弱点の克服を。つまずきやすい所は繰り返しやれるといい。 ・児童はICTを活用した授業をどのように受け止めているのでしょうか。 ・家庭学習は保護者の協力があってこその成果と思う。	■子どもの実態をとらえ、授業展開を組み立てていく形で研修を進めていく。 ■効果的なICTの利用について今年度も研修を進める。
	学習規律の確立 ・主体的・対話的で深い学びがある授業を確立する。	・「授業中しっかり話を聞き，積極的に考えようとしている」と答えた児童の割合80％以上 ⇒85.3％	A	○全学年が研究授業を行い、児童に考えを持たせるためのめあての工夫や発表の場の保障をし、意欲的に活動できる授業内容になるよう心がけた。 ▲話す・聞くに焦点を当て、児童同士が高まり合う授業にしていくための手立てについて、さらに研修を進めていく必要がある。		■発達段階に応じて「話す・きく」の指導に、全校である程度統一して取り組む。 ■グループ学習やペア学習をどのように取り入れていくか研修を進め、どの子も意欲的に活動する姿を目指す。
	家庭学習の習慣化 ・その子に合うステップアップ学習の推進と，家庭学習・生活読書強化週間の定着を図る。	・「学校は宿題や課題を適切に与え，家庭学習の充実が図れるよう工夫している」と答えた保護者の割合80％以上 ⇒90.6％	A	○家庭学習・生活読書の取組強化週間を行ったり、ステップアップ学習の見本などを提示していったりしたことで、保護者の方の支援を得ることができている。 ▲今後も家庭学習の大切さについて啓発し、家庭学習への協力を求めていく。		■家庭学習・生活読書の取り組み強化週間を来年度も続けていく。 ■ステップアップ学習での個人差が大きくなってきているので、系統立てたステップアップ学習に改善していく。
安全安心な学校づくり	**安心できる学校づくり** ・安心できる居場所のある集団づくりに取り組む。	・「学校が楽しい」と答えた児童の割合80％以上 ⇒76．3％	B	○スクールライフサポーターやスクールカウンセラー，行政，医療機関とも連携しながら，教育相談や登校支援を行えた。 ▲今後も子どもたちにとって，居心地の良い学校づくりを目指す。そのために，日ごろから子どもたちの小さな変化を見逃さないようにして，児童理解に努める。	・小規模校の利点がさらに伸びることを期待します。 ・いじめについては、子どもたちの様子を見ていても感じられない。 ・学校が楽しいと答えた割合は少ないのは仕方がないことかもしれない。コロナ禍により、制限されることが多く、楽しいとは言えないかもしれません。 ・子どもたちの元気な集団登校に「声かけ」をすることで元気をもらっている。集団登校してこない児童の家庭での様子が気がかり。 ・地域ぐるみの活動が必要と思う。コロナ禍が収束したら、まちづくり協議会・学校運営協議会での協働体制について話し合ってみる必要もあるのではないか。 ・防災に関しては、子どもたちだけではなく保護者にも関心を持ってもらえるように努めたい。	■一人ひとりの子どもに丁寧に寄り添うことで，子どもが抱えている不安や悩みを明らかにしていきたい。また，先の見えないコロナ禍という状況ではあるが，感染対策を講じながら，できる限りの行事や活動等を行い，学校に楽しさを見出せるようにしたい。
	いじめのない学校づくり ・いじめの未然防止と早期発見・即時対応に努める。	・「学校は、児童間の人間関係の確保に努め，いじめを許さない仲間づくりに努めている」と答えた保護者の割合80％以上 ⇒92.9％	A	○いじめアンケートや普段の様子から汲み取れた児童の実態を，毎月，子ども理解会議を開催して，職員間で共有することができた。 ○児童会によるいじめ防止活動を行うとともに、いじめアンケートの聞き取りとして教育相談週間を設け，いじめの早期発見に努めた。 ▲いじめの認知件数は2学期末で1件であった。今後も児童の様子を常に観察し，早期発見に努める。		■来年度も，いじめアンケートをとった後に年１回以上教育相談期間を設けて，一人ひとりの子どもの思いを知る機会とするとともに，いじめ事案等に即座に対応できる体制を整えていきたい。
	防災避難訓練や安全教育等の実施 ・鈴鹿署や教育支援課と連携しながら,年間計画に則って防災教育や安全教育を実施する。	・保護者や地域住民参加型の避難訓練や防災学習会等を実施する。（年3回）⇒年3回 ・鈴鹿署や教育支援課と連携して，交通安全や万引き防止，不審者対応，ネットモラル，薬物乱用防止教室等を開催する。（年3回以上）⇒年8回	B	○市教委や民間企業とも連携し，スマホの使い方や防犯教室を全学年で開催することができた。また、避難訓練の日程を変更しながらも計画的に実施することができた。 ▲いつ何が起こっても対応できるように，今後も防災・安全教育を積極的に実施していく。また，今後は避難訓練の方法等についても検討する必要がある。		■実際に災害が起こった時に対応ができるように，保護者や地域と連携しながら，防災・安全教育を実施していきたい。
開かれた学校づくり	**地域連携・地域ぐるみの教育** ・地域人材を活用したキャリア教育を推進する。	・児童アンケートで，「将来，なりたい職業や仕事がある」と答えた児童の割合80％以上 ⇒79.1％	B	○地域の人と一緒に活動し,教育活動を支援していただくことで,子どもたちは地域の人に支えられていることを実感できた。 ▲新型コロナウイルスの影響もあり,地域の人と一緒にコミュニケーションを取りながら活動することが十分にできなかった。今後,どのようにすれば地域の人と連携した活動を充実させていけるのか検討していく必要がある。	・コミュニケーション活動の積極化は、まちづくり協議会での主要なテーマでもあり双方が同調して進む必要があると思います。 ・登校や集団下校にもっと地域の人に協力いただければと思う。そこで子どもたちとのコミュニケーションが生まれるのでは。 ・地域も学校に対して無関心のところがあるのではないか。 ・コロナで難しいかもしれないが、ボランティアさんとの共同作業等が増やせればもっと地域との密接な関係が作れると思う。 ・公民館おじさんセミナーの人たちも児童たちとの交流を強く望んでいる。特に体験学習を通しておじさんたちも自己啓発に励むことができ、生きがいを感じると話している。 ・昨年、一昨年に比べて今年は挨拶ができる子どもたちばかりです。 ・子どもたちは顔を知っている人には子どもの方から挨拶をしている。 ・挨拶は地域の人たちもできない人がいる。お互いに自己啓蒙が必要。	■地域の人と一緒に活動する行事の取り組み方法を工夫しながら、実施可能な行事を地域の方と連携して進めるようにしていく。
	児童の自主的な活動 ・笑顔であいさつができる子どもの育成をめざす。	・「地域の人や家族，友だちや先生にあいさつをしている」と答えた児童の割合80％以上⇒80.5％	B	○児童会であいさつ運動を実施した。（5月・10月・3月）児童会を中心にスローガンを決め，意識して取り組ませた。 ▲地域からは，あいさつができない児童がいるとの報告もあり，誰に対してもあいさつができるよう指導していく必要がある。		■来年度も引き続き，児童会を中心に年３回あいさつ運動を実施し，周りの人に笑顔で挨拶ができるような取り組みを行っていきたい。

Ａ－達　成（関連児童・保護者アンケート項目の結果が80％以上の項目）
Ｂ－未達成（関連児童・保護者アンケート項目の結果が50％以上80％未満の項目）
Ｃ－課題あり（関連児童・保護者アンケート項目の結果が50％未満の項目）